

五山の禅僧と「梅」について

はじめに

五山文学は、鎌倉時代末から室町時代を通して、京都、鎌倉の五山の禅僧たちを中心に、盛んに作られた漢詩文である。その中でも梅を詠んだ詩が非常に多くあることが注目される。

有岡利幸氏は「五山の漢文学の中では、じつにたくさん禅僧が梅にかかわる漢詩や散文をつくったのである」^①と指摘され、禅僧と梅とのかわり、梅の好尚、梅見と詩会について言及された。ところが、五山文学の研究史において、梅を主題として論じられたものはほとんどない。

本稿は、五山文学において、「梅」にかかわる漢詩や散文を取り上げ、五山の禅僧たちと梅の関係について、有岡利幸氏が述べられたことに、ささやかながら付け加えたいと考えている。また梅を愛

した中国の詩人林逋に關わる詩を取り上げ、五山時代の詩人の梅に對する感性、美意識、中国詩の受容の様相を明らかにしたい。

黄

珣

一 梅の好尚

中国の文人は家の周囲に梅を植え、梅花を愛した。宋代の范成大には『范村梅譜』という梅の品種数十種をのせた著述がある。当時の梅の品種や園芸の発達の資料として貴重なものである。

梅が天下のとくにすぐれた物であることは、賢者であると愚者であるを問わず異論をさしはさむものはない。園芸を学ぶ人は必ず何よりも梅を植えるのを先にする。そしてそれが多くことは厭わない。他の花があるかどうか、また多いかすくないかはすべてかわりがない。私が石湖の玉雪坡にいたときすでに数百本の梅があった。近年また家の南に王氏の借家七十軒を

買った。それらをすべて取りこわし、整地して范村とした。そしてその地の三分の一に梅を植えた。呉（蘇州）の地方は梅を植えるのがとりわけ盛んである。^②

日本の五山の禅僧は中国の梅に関わる事情に詳しいようである。たとえば彦龍周興は「梅處齋記」に次のように述べている。

夫在六經之中、我未目梅也、在六朝之先、我未耳梅也、豈果無梅乎、只言其實、不及其花耳、梁陳隋詩賦、唐宋元諸公、連篇累牘、言則必梅、而只言其花、不及實矣、范成大曰、学圃之士、必先種梅、且不厭多、又曰、以范村三分之一地、與梅有譜可考、以至和靖之千樹、放翁之億身、有尋而結社者、有愛而築堂者、或構梅閣、或架梅亭、曰梅軒、曰梅莊、不可勝計也。^③

彦龍周興は中国の梁以後から梅花を重視し、宋の時代には梅を愛でる風習が盛んであったことを述べた。

五山文学の時代では、梅を植え、その花を愛でることも盛んだったようである。希世靈彦の「霜松軒詩並序」^④に次のように述べている。

長祿元年丁丑十月十日、杉原伊賀守賢盛、有猷一枝梅於大相府君（足利義政）、々吟賞之余、偶得一句以告賢盛、々自謂、優寵蔑加、弗勝感戴、遂裝潢什襲、以為傳家之寶、

賢盛は足利義政に梅一枝を献上し、足利義政がその梅を觀賞し、

詩句を詠じたことを述べた。

驢雪鷹瀾は詩序に、「景紀公私第之側、有梅之野而連理者、公以紅白接之、今茲移之於寢居之庭外、以愛花之美者、其雅思可觀焉、因命予（驢雪鷹瀾）作一絶、以擬元人梅墅云。」^⑤と述べた。景紀公は野の梅の連理の枝に紅白梅を移植し、自宅の寢室の庭に植えたこととで、愛花の高雅な情趣を表した。

惟肖得巖の「梅花野処記」^⑥には、「余嘗與客、往造于梅花野処、主人以風流称于禅林者也。」とある。惟肖得巖は客とともに、風流をもって禅林に称え、梅花の野処に住む人のところに訪れた。

惟肖得巖の「憶梅齋記」^⑦に、

福山（建長寺）南叟藏司、書齋則環植梅花數株、盤桓其間、瀟洒不凡之標可想矣……予居京師也久、頗復嗜梅、候花時節、自輦下九坊、至于洛東洛西、無不周探以遍覽焉、

と述べている。惟肖は建長寺の南叟藏司が、書齋の周囲に梅花を植えて、花樹の間に留まり、非常に瀟洒な姿を羨ましく思った。彼自身はかなり梅を好み、梅開花のとき京都のあらゆるところに梅見に行っている。

禅僧の中でも萬里集九は梅好きで、自分の庵に「梅花無尺藏」と命名し、みずからの別号を「梅花無尺藏漆桶子」または「梅庵」、「梅庵某万里」、「梅花無尺藏万里」、「梅花無尺藏漆桶万里」、「梅子」、

「梅子某」、「梅子某漆桶」、「梅某」、「梅某漆桶」など、いろいろに称している。彼はまた「梅花無尺蔵」という七巻の文書をもつ。「梅花無尺蔵」は、萬里の詩文集であり、その詩数、千四百五十一首、文の数、百十一篇という雄編である。彼の文集の中、その文集に詠じた「花」および名前がある花を統計してみると、

花 210、梅 177、菊 29、蓮 23、海棠 23、牡丹 22、桃 17、杏 15、櫻 13、薔薇 13、蘆 10、山茶 7、朝顔 6、水仙 6、槿 3、芍薬 3、木犀 1、茜 1、榴花 1、卯花 1、藤花 1、凌霄花、野菰 1

などがある。多くの場合は「花」と詠じ、どんな花か不明である。花の名前を明らかにする場合で、「梅」の名が見られる詩は177首あり、他の花と比べ圧倒的に多いことが注目される。

禪僧たちは梅見を行った。梅の花見「同横川等北野靈廟、看梅」^⑤によれば、萬里は横川らと同行して、北野天神廟で梅の花見をした。禪僧は色々ところに観梅をした。乾峰士曇の「探梅詩軸」^⑥に、次のようにある。

恵山（東福寺）烏頭子曇春（東巖）、夙根英發之兒也、吟遊之次、尋梅於霜天雪地、山北嶺南、幽谷之間、草棘之下、以至哦林和靖之八句、披華光寺之十圖、眼想心思、無處不覓焉、東福寺の東巖禪僧は、詩を吟詠し、あらゆるところに梅を尋ねたことを記録している。

看梅（梅見）として立ち木に咲く梅花を禪僧たちは観賞していたが、開花した梅の枝を室内にもちこんで瓶に差し、「浴梅」（梅を浴びる）をも楽しんでいたのである。

禪僧たちは梅を愛唱し、高く評価された。横川景三は「松竹斎主墨梅後序」で、

天地之間、花可愛者、梅莫之如也、

天地の間、可愛い花は、梅に比べるものがないと称え、また彼は「梅岩字説」という散文の中で、

梅者天地尤物也、養于冰雪則村莊野處、知為百花之魁、實于煙雨則金盤玉鼎、知為百酸之美矣、是以茂之騰英之飛、不可與他草木同日而語也

と述べ、梅というものは天地の間におけるもつとも優れたものであり、百花の魁となっていることを言う。梅の実は「百酸の美」とも称えられた。

「十菊十梅詩序」^⑦にも「梅者天下尤物也」とあり、梅というものは天下におけるもつとも優れたものであるとされている。

正宗龍統の「雪月梅鴛鴦図」^⑧に「梅之以花鳴天下者、其香之與色使之然、紅白同香而如異色」とあり、梅はその香と色、紅白の異色があるが薫りは同じだと述べている。ここで梅花は天下の花と称えられている。

萬里集九は「梅浦説」^⑬において、世の人があげて梅を賞賛することについてつぎのように述べる。

花実之芬芳。無超梅之者。豈不天地之英物乎哉。故舉世而愛賞。于詩于書、于史傳小説、掛其声名。有稱清容者。有号木母者。有名姑射神者。有喚羅浮仙者。

萬里集九は、梅の別称に清容、木母、姑射神、羅浮仙があると説く。また、梅の花とその果実の芳しい香気は幾千万ともしれない花木の中にあつて、梅を超えるものはないと誉めたたえる。

心田清播は「梅先生詩」^⑭に、「夫梅先生之稟炁、至大至剛也、氷霜以煎焉、堪輿以育焉、故為百卉之宗、而縱三冬之交、其清高可知矣」と、梅を清高な先生と称え、その凜然剛強の性質をもつて、百花の宗となると賛美した。

禅僧たちは梅の詩会を行つた。ある日、横川、桃源、景除、實澄など四人は詩を詠じた。横川景三の「菊後話梅 会小倉私宅」^⑮に、その四人の詩が集められている。横川の「樽前一醉無儒佛、笑摺袈娑話早梅」詩句によつて、禅僧たちは笑つて、酔つて、儒佛を忘れ、早梅の話ばかりをした。景徐の詩句「口不言梅死不休」によれば、梅を言わない人生はなんと惜しいものかという愛梅の心を現した。

禅僧たちはどんな梅の話をしたか不明だが、その「十梅」の詩に、^⑯

五山の禅僧と「梅」について

ど梅のさまざま様相を示した。また南禅大道和尚を追悼するために六十四名の禅僧が「大道一以追悼頌軸」^⑰を作つたが、その中では、落梅、大梅（法常）、塩梅、一朵梅、雪中梅、松竹梅、雨裏梅、暗香動月一枝梅、~~梅~~梅、滿庭梅、盧能（六祖慧能）一夜宿黃梅、月下梅、野梅、瓶梅、半樹梅、楊梅、老梅、醉梅、殘梅、五更梅、止渴梅、一株梅、畫十梅、嶺南梅、屋里梅、何處梅、二月梅、逋梅、疎影橫斜處士（林逋）梅、墻角梅、烏梅、藥與梅、爍迦羅眼視梅々、手種梅、紅白梅、柳梅、厄棗梅、妙喜（大慧宗杲）在衡梅、十科梅、台梅、去年梅、癭似鶴兮清似梅、嶺頭梅、御苑梅、黃梅山上梅、五葉梅、墓門梅、人々造次必於梅、西湖雪後梅、含章貼額梅、一村梅、帶酸梅、月在梅、玉梅、標有梅、雪梢梅、烟塢梅、隴梅、暗香梅、醬梅、禹廟大梁元是梅、微粲梅、一度春風一度梅、青梅などの詩語があり、禅僧たちの詩に詠まれた梅の様相が集められている。その中で「逋梅」、「疎影橫斜處士（林逋）梅」、「西湖雪後梅」、「暗香動月一枝梅」は皆中国の詩人林逋に関わる。五山の禅僧がなぜ林逋と林逋が住む西湖を詠むのか、彼の詩句を借用するののかについて、次に究明したい。

二一 梅と林逋

『中国の愛の花ことば』という本で、中村公二氏は、「古来中国に

は愛梅家と呼ばれる人物が数多くいる。たとえば六朝時代の梁（六世紀）の詩人として有名な何遜は、かつて揚州（現在の揚州市）の役人をしていたが、官舎の前にあつたみごとな梅の樹が忘れられず、わざわざ願い出て再び同じ土地の役目に就けてもらつたという。そのほか孟浩然や范成大など梅を愛した人士は枚挙にいとまないが、かの国第一番の愛梅家はと尋ねられたら、それはなんといつても北宋の詩人・林逋（和靖）をあげなくてはなるまい」と述べた。

惟肖得嚴の「梅隱軒叙」に

某上人、雅志冲澹、企思乎言詩、或者以梅隱二字、……孤山処士林君複、最愛茲花蟬蛻軒冕之市、鳳鳴湖山之陽、賦八篇以託音、拒徵命以全節、故其人之與花、賸馥乎一時、流芳於千載、

蓋梅隱于古而見于今、君複隱諸身而彰諸名矣、上人景慕、其在、此耶、

と述べている。ある禪僧は、高雅で淡泊、詩に思い尽く、梅隱と号した。彼は、君山の林逋は梅花を愛し、湖山に隱居し詩を吟じ、仕官もせず節を全たことを、敬慕する。林逋と花は千載に流芳すると称えた。

中国文人の中、「仙」は最高の美称とされている。ただ李白一人は「太白金星」の転生と言ひ伝え、「仙人」とされている。日本の五山の禪僧は林逋を「仙人」と称えた。南江宗元「早梅和韻十首」^{②4}

「逋仙曾托主林神」林逋は逋仙と称した。乾峰士曇「閑居对瓶梅」に「千思萬想西湖 逋仙仙去今何在」と述べて、西湖梅、逋仙に対する憧れを表した。また横川景三は「松有陶令（陶淵明）、梅有逋仙（林逋）」^{②5}と言ひ、林逋を逋仙と称えた。江西龍派の「梅五首」^{②6}其の一「逋仙仙去」、其の五「逋仙仙去後」にも林逋は逋仙と称えられている。

日本の五山の禪僧が敬慕し、仙人とした林逋（九六七―一〇二八）は、字は君復である。钱塘（浙江省杭州市）の人で、幼くして父を失い、苦学した。はじめ江淮（江蘇・安徽両省のあたり）を漫遊、のち杭州に戻り、西湖のほとりの孤山に隱居した。一生涯を通して仕官せず、また妻帯せず、梅を植え、鶴を飼ひ、「梅妻鶴子」と称せられた。范仲淹、梅堯臣らと詩の応酬をしている。行書や画にもたくみであった。没後、和靖先生と諡されている。「林和靖詩集」がある。林逋の代表作は、七律「山園小梅」である。「山園」は、作者が隱棲していた孤山のふもとの庭園。この詩が世に出てから、中国で梅の花を詠ずる風潮がますます盛んになった。

衆芳揺落独暄妍、占尽風情向小園、疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黄昏、霜禽欲下先偷眼、粉蝶如知合斷魂、幸有微吟可狎、不須檀板与金尊。

まず他の花がみな散つた後にひとり咲く梅の様子を詠じ、あとで

梅の枝と香りを描く。そして鳥や蝶も梅の美しさに注目する様子を描く。

岩城秀夫氏の『中国人の美意識』に「この詩が宋の詩人の美意識に大きな影響を与えたことは、詩話の類でしばしば言及されることよって知られる。また宋の黄大輿が梅に関する詞を集めて編んだ『梅苑』十卷に、林逋の詩句を援用した作の多く見られることでも明らかである」と述べている。彼はまた『四庫全書総目提要』集部詞曲類の部に、

昔、屈宋偏陳香草、独不及梅、六代及唐、篇什亦寥寥可数、宋人始重此花、人人吟詠、

の言葉を用いし、「六代及び唐の篇什が寥寥として数すくないというのは、やや強調にすぎるとしても、梅花が宋人に大そう愛好されたことは、これを詠じた詩篇の多いことよって確かめられる。さらにいえば、総じて宋人は唐人に比べて、梅花に目を近づけ、細やかな愛情で接しているといえる」と述べている。

日本の五山の禅僧には梅花を詠じた詩篇の数が非常に多くあることは先に述べたが、その梅詩の中でしばしば林逋を詠じ、称えることは、一つの特徴といえる。以下に林逋を称えた例を挙げる。

正宗龍統は「逋仙梅屋扇面」の詩に林逋を逋仙と称し、

顧梅之為梅、雖云處處皆梅、至乎西湖始是梅也、梅之有遺、未

五山の禅僧と「梅」について

有盛於此矣、人皆只知杭州之以西湖為眉目、而不知天地之以逋仙梅為眉目、知者其誰與、河清（祖瀏）始言之。

と述べた。林逋が西湖に植えた梅を「本の梅」、「天地の目」と称している。

季弘大叔の「西湖図」に次のように述べている。

西湖以梅而重焉、梅以和靖而重焉、横斜浮动之香影也、享自然之新昼也、天地開闢以来、雖有此梅、而無和靖則梅不能以為梅也、西湖只是一野水而已、和靖何人也、能定梅花乎九鼎之重也、倍西湖乎連城壁價也、梅花若有意、則其築麟閣以像和靖于昏月之中乎、蘇東坡曰、西湖杭之眉目也、惜哉此論矣、其謂天下之眉目、則可乎、戲代梅花而西湖之餘蘊云、

我曾湖上問逋仙、的皜梅花一粲然、今日披窗三笑處、樓台彷彿六橋前、

ここにも林逋を逋仙と称え、林逋が西湖の梅を愛した為、天下の人々も梅を重視するようになったことを述べている。林逋の梅の詩は、日本の五山文学大きな影響を与えたのである。

林逋の梅を日本の禅僧が愛するようになった例を次に挙げる。萬里集九の「貼西湖梅詩序」に、次のようにある。

丙午小春。余入相州金澤稱名律寺。西湖梅以未開為遺恨。富士則本邦之山。而斯梅則支那之名産也。唯見蓓蕾。而雖未見其花。

豈非東遊第一奇觀乎哉。金澤盖先代好事之庄。属南船移杭州西湖之梅花於稱名之庭背。以西湖呼之。……巨幅山有識面。丁未之春。摘其花数十片。為一包見惠焉。己酉夏五。余皈濃之舊廬。

奉獻彼一包於春澤梅心翁。々借余手描枝條貼其花。

この詩の序文によると、萬里集九は、金沢の称名寺で西湖からもたらした林逋の梅を見たが、未だ蓄で花を開いていなかった。残念がっている、のちに建長寺の知人が、その花びらをつみ、一包にしてくれた。万里はこれを大切に持ち帰り、承国寺の春沢梅心翁に差し上げた。梅心は万里に梅の枝を描かせ、これにその花びらを貼りつけさせたという。萬里集九の林逋の梅には西湖の梅に対する慕情があらわれている。

五山の時代には林逋の画像があり、その画像に賛詩をつける風習があった。以下は五山の僧の林逋に対する賛詩の例である。

「横川景三は林逋の画像の賛詩四首を作った。『和靖軸賛』²⁶は

西湖自古以梅鳴。処士宅前千樹橫。山落波心三百寺。袈裟影傍

釣船行。

と、西湖は古来梅を以て有名になり、林逋の宅前には千株の梅樹がある。山と多くの寺の影が湖に落ち、僧人は釣り船にいると述べている。

萬里集九には和靖（林逋の諡号）の画像の賛詩二首があり、梅花

の景色を称えた。「題和靖畫軸 梅外有遠山」²⁷は

湖水堂前春一湾。梅花不負主人顔。全雖封禪無遺草。黛色朝来对遠山。

と、春さき、湖水邊、美しく咲いている梅花がある和靖宅の景色を描いた。

希世靈彦の詩にも、林逋の画像を題した賛詩が多く、林逋の生活のさまざまな様相が現れている。「和靖放鶴図」、「和靖愛梅図 焼画」、「和靖回棹図」、「和靖看梅図」、「題和靖隱廬招湖上故人」、「梅下和靖」、「和靖梅邊覽句図」、「和靖石上吟坐図」、「和靖雪裏看梅図」、「和靖雪朝詩興図」、「和靖雪後看梅図」、「和靖湖上帰權図」、「和靖暮帰図」などの詩がある。

希世靈彦には、林逋画像の賛詩ではなく、林逋本人の賛詩「賛林和靖」²⁸がある。

跨鶴升仙五百霜、孤山々下月荒涼、身前身後風流絶、名在梅花枝上香、

と述べ、林逋は仙人になって空に上り、もう五百年を過ぎ去って、孤山は月の下にでいかに荒涼としているだろう、彼の名前は梅と共に香り、風流さは絶頂だろうと想像した。

柏巖繼趙の「林和靖賛」²⁹は

梅邊携杖老林逋、鶴逐童来不待呼、香影一聯句成後、人間風月

属西湖、

と、梅の傍に杖を携え、年を取った林逋は、鶴と童子と共に居る。彼は「疎影暗香」という詠梅詩句を作った後、人間の風月は西湖に属しただろうと述べている。

瑞沢周鳳の「和靖愛梅 有童鶴」は

咸平高士一林逋、身住孤山徳不孤、
仙客昂然清客案、共童侍立滿三隅、

と、咸平高士一の林逋は、孤山に住んでいるが、徳の盛名があり、仙客としての鶴と清客と言われる梅と童子は、共にいると述べた。

天隠龍澤の「和靖像」は

天到咸平生偉才、詩如東野字西臺、
醉餘獨愛湖邊宅、封禪無書唯有梅、

と、咸平の時生れた天才和靖は、詩が東野の如く字が西臺の如く、酒に酔って西湖湖邊の宅を特に愛し、仕官に興味無く唯梅好きだと述べている。

江西龍派の「賛林和靖」は

夷（伯夷）齋（叔齋）名節典刑存、
吾愛吾廬湖上村、西祀東封混一外、梅花世界鶴乾坤、

と、林逋は西湖の村の廬を愛し、仕官することには関心が無く、梅花と鶴は彼のすべてであると述べている。

心田清播の「賛和靖」には³⁶⁾

處士清高獨絶倫、梅花気骨鶴精神、
当時儻逐東封駕、山緑湖光孤負人、

と、林逋の清高、梅花の気骨、鶴の（飘逸）精神を称えた。

以上のような林逋を主題とする詩は『五山文学新集』に36首があり、中国の詩人を称える賛詩の中では最も多い³⁷⁾。その中で、よく詠まれた題材を数えて見ると以下のようである。

梅花18、梅15、鶴19、童子15、雪9、孤山8、湖8、西湖7、湖山7香7、處士4、詩4、春4、月4、徵書3、封禪3、籬3、仙2

林逋と梅が結びつけてよく詠まれたことがわかる。梅は綺麗な西湖、孤山という風景において、雪や月などと組み立てられ、その美しい自然の中、また伝説の中で、仙人の乗る白鶴、天真な童子とともに詠まれた。高潔な林逋はまるで仙人のように見えただろう。林逋の梅の詩は、日本の五山の禅僧たちに大きな影響を与え、梅の詩をよく詠むようになった一つの要因と考えられる。

おわりに

五山の禅僧の多くは、詩文の中で梅に関わった。彼らの作った詩文によって、禅僧は梅を植え、梅を觀賞し、詩を詠んだ。禅僧は梅

を愛し、「梅は天下の尤物」、「百花の魁」などと讃えた。このことは、中国の詩人林逋の梅の詩からの影響が考えられる。梅を妻ほどに愛した林逋が持つ高潔さ、神秘さに触れた。また彼が西湖の水、山、鶴、月などが構成した水墨画の美しさの中に梅を詠み込んだ詩を鑑賞し、まるで、仙境のような美の世界を感じたと思われる。この林逋の梅の詩が、日本の五山の禪僧が梅の詩を愛する一つの契機を与えたと考えるのである。

注

- ① 有岡利幸『ものと人間の文化史 梅』、法政大学出版社、一九九九年十一月。
- ② 佐藤武敏編訳『中国の花譜』、平凡社、一九九七年九月。
- ③ 彦龍周興「半陶文集二」『五山文学新集』第四卷、一〇五三頁。
- ④ 希世靈彦「村庵藁」中『五山文学新集』第二卷、三九〇頁。
- ⑤ 驢雪鷹瀟「驢雪藁」『五山文学新集』別巻二、一七一頁。
- ⑥ 惟肖得巖「東海瑠華集三」『五山文学新集』第二巻、七五三頁。
- ⑦ 同上、七五三頁。
- ⑧ 『梅花無盡藏注釋』第一冊、二七頁。
- ⑨ 乾峰士曇「乾峰和尚語録二」『五山文学新集』別巻一、四三二頁。
- ⑩ 横川景三「輔庵京華別集」『五山文学新集』第一巻、五五三頁。
- ⑪ 横川景三「小補東遊後集」『五山文学新集』第一巻、一〇七頁。
- ⑫ 「建長寺龍源菴所藏詩集二 十菊十梅」『五山文学新集』第三巻、六七頁。
- ⑬ 正宗龍統「禿尾長柄帚下」『五山文学新集』第四巻、一〇七頁。
- ⑭ 「梅花無盡藏」第六冊、二九五頁。
- ⑮ 心田清播「心田詩藁」『五山文学新集』別巻一、八九一頁。
- ⑯ 横川景三「小補東遊集」『五山文学新集』第一巻、五十二頁。
- ⑰ 「建長寺龍源菴所藏詩集二 十菊十梅」『五山文学新集』第三巻、五七三頁。
- ⑱ 「詩軸別成」『五山文学新集』別巻一、九八〇頁。
- ⑲ 中村公一「中国の愛の花ことば、草思社、二〇〇二年十月、二九頁。
- ⑳ 惟肖得巖「東海瑠華集三」『五山文学新集』第二巻、八〇六頁。
- ㉑ 南江宗元「南江宗元作品拾遺」『五山文学新集』第六巻、二五八頁。
- ㉒ 「乾峰和尚語録五」『五山文学新集』別巻一、六三三頁。
- ㉓ 横川景三「輔庵京華新集」『五山文学新集』第一巻、七二二頁。
- ㉔ 江西龍派「續翠詩集」『五山文学新集』別巻、三三〇頁。
- ㉕ 岩城秀夫「中国人の美意識」創文社、一九九二年三月、八一頁。
- ㉖ 正宗龍統「禿尾長柄帚下」『五山文学新集』第四巻、一一三頁。
- ㉗ 季弘大叔「松山序等諸師雜稿」『五山文学新集』第六巻、三四七頁。
- ㉘ 『梅花無盡藏注釋』第四冊、一九八頁。
- ㉙ 横川景三「補庵京華新集」『五山文学新集』第一巻、六六六頁。
- ㉚ 『梅花無盡藏注釋』第一冊、四四七頁。
- ㉛ 希世靈彦「村庵藁」『五山文学新集』第二巻、四九九頁。
- ㉜ 柏巖繼趙「水南詩集」『建長寺龍源菴所藏詩集二 邵庵老人詩』『五山文学新集』第三巻、六〇八頁。
- ㉝ 瑞溪周鳳「臥雲藁」『五山文学新集』第五巻、五一四頁。
- ㉞ 天隱龍澤「默雲藁」『五山文学新集』第五巻、一一〇四頁。
- ㉟ 江西龍派「續翠詩集」『五山文学新集』別巻、二〇二頁。
- ㊱ 心田清播「聽雨外集」『五山文学新集』別巻一、六七一頁。

⑳ 希世靈彦の詩以外、横川景三「題和靖像」・「畫贊 和靖（林逋）」・「和靖（林逋）贊 走筆」、萬里集九「題和靖圖」、惟肖得巖「贊和靖先生」、柏巖繼超「和靖梅」、彦龍周興「贊林和靖」、蘭坡景臣「題和靖像」、瑞溪周鳳「和靖像 有指物之形、童侍後携梅」、江西龍派「題和靖宅」、
「題和靖愛梅図」、心田清播「和靖愛梅図」、天章澄叅「和靖畫像」、「和靖遊湖寺圓」などがある。